



道産木材の 高付加価値 組化

資源活用第二課

森林王国北海道の最新情報をお届けします。

北海道の森林は、先人のためまぬ努力により、トドマツ、カラマツを中心に人工林資源が充実してきています。

私たちは、古くから木材と密接な関係にあり、生活を支える様々な場面で木材製品を利用することにより、木の文化の恩恵を受けてきました。

用途の広がりをみせる
木材

木材の用途は、住宅、家具類、製紙原料のほか、近年においては、公共建築物等の非住宅分野における構造・内装材での利用や木質バイオマスのエネルギー利用、家畜の敷わらや飼料等の農林水産分野での需要が増大傾向にあるなど、用途の広がりを見せています。

こうした中、林野庁では、林業の成長産業化と森林資源の適切な管理を実現するため、間伐等の森林整備を推進しています。

また、強度が高く、材面の経年変化が美しいカラマツの特性や材の白さを活かし内装材や家具材への利用が広まるトドマツなど北海道産木材の魅力が徐々に認められています。

伐採された樹木は、いろいろな長さの丸太となつて、土場に集積されます。その後、製材工場等に販売され、用途に応じた加工が施された後、消費者に提供されていきます。

国有林材の 安定供給システム販売

国有林で生産される丸太等の販売方法として、公売（委託販売）のほかに、「国有林材の安定供給システム販売」（以下「システム販売」という。）を実施しています。

システム販売は、丸太や立木の安定供給を通じ、地域の林業・木材産業の活性化や新たな需要開拓に貢献することを目的として、製材工場、合板工場、流通事業者、木材輸出業者等の幅広い事業者と協定を締結し、木材を

供給するものです。

道内の木材利用の現状

北海道産のカラマツやトドマツ等の丸太の約5割が製材用となつていますが、その主な用途は、梱包材、パレット、型枠用桧木等の産業用資材であり、建築材としての利用は半分以下となつていのが現状です。



内装にも木をふんだんに使用した建築物



ハーベスタによる伐倒作業

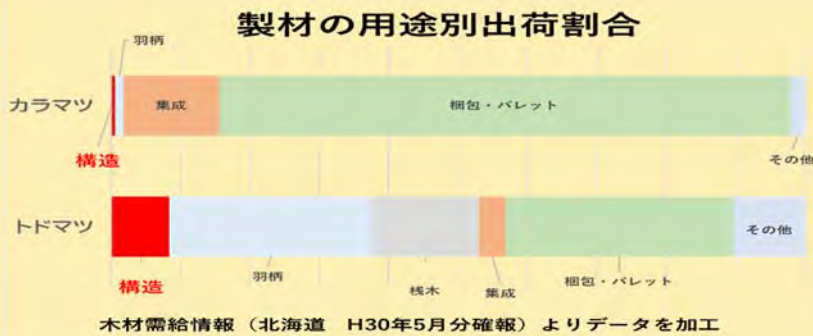


製材工場で丸太を挽いている様子



土場に集積されたシステム販売材

一方で、道内の森林に目を向けると、トドマツなどの人工林が約150



また、建築用の製材品としては、トドマツ丸太に一定の需要があるものの、羽柄材（間柱や垂木など）が中心で、付加価値の高い建築構造材（柱や梁など）としての利用は少ない状況です。

このため、材質の特徴を活かした利用と適切な評価が求められます。これらの大径木を付加価値の高い建築構造材として利用されるよう、需要者のニーズを踏まえ、大径材丸太の販路拡大と供給体制の構築が必要となっています。



構造材に道産トドマツを使用した建物
(宗谷署庁舎平成29年11月撮影)

万haありますが、林齢構成は46〜50年を頂点とする釣鐘型の分布となっており、今後、道内の人工林の高齢級化に伴い、大径木の供給が増えていくことが見込まれます。

システム販売における新たな取組
こうしたことから、北海道森林管理局では、今年度より新たな取組として、システム販売において、木材の高付加価値化と、川上（森林所有者、素材生産業者等）から川下（消費者、需要者）までのサプライチェーンの構築を推進しています。具体的には、供給量の半数以上を建築材として使用することを条件として一定径級（24cm以上）及び一定品質を確保した良材物件（樹種はトドマツ及びカラマツ）を設定したうえで、石狩、上川南部、網走西部、西紋別、根釧西部、十勝東部及び大雪山の各森林管理（支）署において、これらについてのシステム販売を試行的に実施しています。次年度以降もこの取組を継続させながら、健全な北海道林業の振興に資するため、木材の高付加価値化と安定供給木材の需給体制の構築に努めていきたいと考えております。

道産木材の高付加価値化に向けた対応

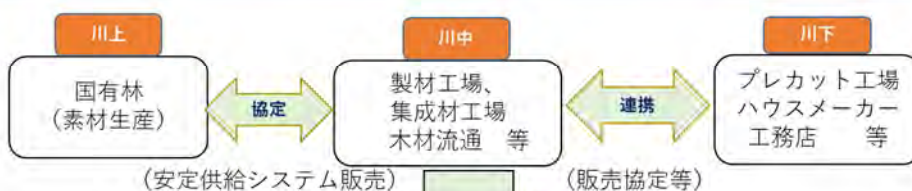
▶安定供給システム販売で、大径の良材主体の物件を供給する取組を試行。これによりトドマツやカラマツの高付加価値化を推進。

供給する原木

・径級24cm以上、一定品質の原木（一般材から選別）

申請の条件

- ・公募物件数量の半数以上を建築等に利用
- ・工務店、ハウスメーカー、プレカット工場等と連携



サプライチェーン構築の推進に寄与